中国人学習者による助詞「に」の習得

楊　　宏　華

はじめに

中国語では助詞はあまり用いられないので、中国人学習者が日本語を勉強する際には、助詞の用法をいくら覚えようとしても、なかなか完全に習得することはできない。特に助詞「に」の用法は多く、多種多様で、より一層把握し難く、本稿は中国人の学習者の助詞「に」の習得状態について、調査してきたものである。

1．外国人に日本語を教える立場からみる「に」の意味用法

助詞「に」の用法の解説について、国文法では、格助詞、並列助詞、接続助詞、終助詞と詳細に四つにも分けられている。解説文は概ねやや硬い表現で書かれているので、外国人によっては理解し難いところもある。外国人に日本語を教える立場の日本語教育にとって、様々な辞書や学習書などの解釈を見るとどの解説文にも、「に」の意味用法の説明に重点が置かれ、解説文はわかりやすいのだが、用法の種類が十分に揃っていないことが多い。従って、今回各解釈を参考にして、中国人学習者が助詞「に」の用法を勉強する立場から、系統的にわかりやすく整理してみた結果、全部で29種類の用法があった。

1）人や物の存在する場所を表わす（具体的な場所、抽象的な場所）。2）動作や事態の時と順序を表す。3）状態・様相を表す。4）動作の着点を表す。5）変化の結果や状態を表す。6）主語（主題）が行う動作•行動の相手を示す。7）動作•作用の向けられる対象を表す。8）動作の目的を表す。9）動作の目的を表わすが、前に来る名詞が動作性を持つ場合。10）用途を表わす。11）広い場所から狭い場所に入る場合。12）動作の行われる場所であるが、「で」ではなく「に」を取る場合。13）動作を行う回数、頻度を表す。14）動作の規準を表す。15）名詞を並べていく追加•列挙を表す。16）慣用用語、名詞の組合せを表す。17）前からその状態になっていることを表す。18）自分の意志に関係なく決定されたこと（ことになる）。19）自分の意志で決定すること（ことにする）。20）受身や使役の動作主を表す。21）原因•理由を表す。22）所有者を表す。23）資格・条件を表す。24）割合を表す。25）「もらう」「動詞＋てもらう」の構文において

何かを与える人（この「に」は「人」に限る)。26)「お～～になる」の形で、尊敬を表す。27)「動詞連用形＋に＋同じ動詞」の形で、強調を表わす。28）文の終わりに付き、残念な気持ちを表す。29）慣用用語（＝「いちおう」)「…するにはしたが」の形で（＝「ことは」)。

2．外国人学習者に使われている教科書からの「に」の文型の調査

外国人学習者が日本語を学ぶに当たって、さまざまな教科書から、多くの学習者に使われている『みんなの日本語Ⅰ、Ⅱ』、『しんにほんごのきそⅠ、Ⅱ』、『文化初級日本語Ⅰ、Ⅱ』、『進学する人のための「日本語初級」』を選び、助詞「に」の文型例を取り出してみると、全部で131例であり、合計14種類であった。他の助詞の文型例に比べ、数がかなり上回っていた。「に」の文型を整理、分類した結果、「に」の基本用法は、それぞれ出現順位は異なっていたが、取り入れられた基本用法の種類と種類の数では大体同じであった。日本語学校では、学習者に初級段階に於いて、助詞「に」の使い方だけでも10種類以上は教えている。しかし、上級レベルに達するには、これ以外に、まだ、10種類以上の用法を覚えないといけないと考える。以上の調査と分析を生かし、実際に日本語学習者が「に」の用法をどの位習得しているかを知るための問題文を作り、アンケートで考察した。

3．アンケートを実施する対象と出題基準

今回のアンケートの対象は専攻に関わらず、日本の大学に在籍している中国人留学生45名、また、それ等留学生の回答と比較するため、日本語学科の日本人学生50名をも対象としたものである。対象留学生の日本語レベルは上級であろうと想定されたので、今回のアンケート問題には日本語初級に出てくる基本的な用法だけではなく、初級の範囲では提出されていないものも出した。アンケート問題文は全部で45問、埋めるべき括弧は48ヶ所で、制限時間は10分とした。「に」と答えたら、正用である問題は全部で25ヶ所、これ以外の23ヶ所はダミー問題として作った。ダミー問題も初級の教科書によく出てくる問題を参考にした。

ダミー問題を除いて、「に」の問題文の解答について、従来の「に」の用法を正確に使った場合、正用とした。「に」は使っていなかったが、他の助詞を使っても、意味はあまり変わらない場合、非用とした。また、「に」以外の助詞を選んで、意味が全然通じない場合を誤用とした。この分け方に従って、正用率（正用数÷全体数)、非用率（非用数÷全体数)、誤用率（誤用数÷全体数）を調べた。

3－1　アンケート結果から正用・非用・誤用の分析

①よく正用に使われている用法

問題45、田中さんはもうお帰り（　）なりましたか。

45個の問題中、唯一留学生全員が正解となった用法は、尊敬語として使われている「お～～になる」の用法を取り入れた45番の問題であった。この用法は留学生にとって難しいと思っていたが、意外にも日本人の学生と同様、全員正解であった。

問題７、山本さんは新宿駅の近く（　）住んでいます。

問題15、先生の机の上（　）花瓶が置いてあります。

問題45番の次によく把握している用法は、正用率93％の７番の問題と正用率96％の15番の問題だった。留学生の場合、最初から「～～に住んでいる」、「～～上に～～が置いてある」、「お～～になる」という形をセットで覚えているのではないか、従って誤用が少なかったと考えられる。

問題19、明け方から雨が雪（　）変わった。

問題44、車（　）降りて、部屋（　）入る。

問題19番と44番について、正用率は日本人の学生と中国人の留学生では殆ど同じである。二つの問題とも日本人の学生の正用率は88％、非用率12％、誤用率０％であり、正用に当たる「に」の代わりに、「へ」が使われていた。この「へ」が多く使われていることから、この「に」の従来の使い方が「へ」に変化してきていると見られる。しかし、問題19番の留学生の回答は正用と誤用だけだから、変化した結果を示す用法については、留学生の中ではまだ、日本人の学生のような変化が見られていない。問題44番は、留学生も７％「へ」と回答したことで、広い場所から、狭い場所に入る場合の「に」と方向を示す助詞「へ」と置き換えできるが、留学生の中では、「へ」の選択率が僅か７％であった。

② 中国人留学生の正用率50％未満の用法

問題４、私は、今日、学校の帰り（　）本屋に寄ろうと思っています。

日本人学生の正用率100％の問題４番では、中国人留学生の正用率は47％、誤用率42％、11％空白であった。「に」の時を表わす用法として取り入れたこの問題であるが、具体的な時（時刻や曜日、月日、年など）を表示していないので、留学生は動詞から名詞にした「帰り」という時を表わす表示の仕方が理解できていないため、誤用に陥ったと思われる。

問題33、酒（　）酔う。

問題33番の原因として使われている用法では、日本人学生の正用率は90％、非用率は10％であった。非用の10％の全員が「で」と書いた。留学生の場合、正用率42％、非用率24％（全員「で」との非用）、誤用率33％である。

問題31、あまりの暑さ（　）倒れる人も出た。

問題31番も原因、理由を示すが、文書の表現の違いによっては「ために」との併用もできる。この用法は日本語初級段階には、取り入れられていない。この問題の日本人学生の正用率は64%、非用率36%（「で」との非用）である。中国人留学生の正用率は27%、非用率47%（「で」との非用）、誤用率27%である。33番と比べて、「で」との非用率はかなり高かった。

問題42、毎朝三十分、ジョギングをすること（　）しています。

問題42番の「に」は慣用的な言い方、自分の意志で決めていることを示している。日本人学生の正用率98%、誤用率２%に対して、留学生の場合は正用率40%、非用率２%（「と」との非用）、誤用率は過半数の58%にも達した。

問題25、料理は寿司（　）天ぷらにうなぎだった。

問題25番に取り入れたのは、接続詞の「それに」に相当する意味・用法で、二つ以上のものを一つ付け加えるような気持ちで並べて言うときに使う用法だった。この問題の日本人学生の正用率は44%、非用率56%の中の「と」との非用は54%であった。留学生の正用率は18%、非用率62%の中の「と」との非用51%、誤用率は20%であった。

問題27、梅（　）うぐいす。

慣用表現を表わす問題27番の正用率は、留学生も日本人の学生も相当低く、日本人学生の正用率は28%、非用率は72%（「と」との非用）であった。厳密に言うと、「梅に鶯、虎に竹」のような昔からの慣用表現には、正答は「に」しか認められない。この問題について、日本人学生の正用率からみると、日本人の若い世代は日本語の中の慣用表現として使われているこのような用法を意外にも把握していないことを示した。逆に７%しか正用していなかった留学生に対して言えることは、ある程度の日本語のレベルと日本の伝統文化の知識を持つに至っていないと、正用することができないのである。留学生の非用率16%中、８%は「と」との非用であった。

問題40、海は荒れ（　）荒れて、船はいっこうに進まなかった。

問題40番も日本語初級段階に取り入れられていない（強調を表わす）用法である。この問題は日本人学生の正用率は88%、非用率12%の中の10%が「て」との非用であった。留学生の場合は正用率９%、非用率67%の中の「て」との非用は38%である。

問題30、あんな人だとわかっていたら、紹介しなかっただろう（　）。

留学生にとって最も正用率の低い「に」の用法は、文の終わりで、残念な気持ちを表わす、という用法を取り入れた問題30番であった。日本人学生の正用率は86%、非用率14%に対して、留学生の正用率は僅か２%、非用率は98%であった。

この用法は文の終わりにきているので、多くの留学生は終助詞を使わないといけないと考え、「に」のかわりに終助詞として、よく使われている「か」とか、「よ」、「ね」などを書き入れたものと思われる。

③「を」の過剰使用

問題６、雲が空（　）浮かんでいます。

問題12、体力の限界（　）達した。

問題33、酒（　）酔う。

問題39、試験の結果（　）失望する。

問題42、毎朝三十分、ジョギングをすること（　）しています。

問題44、車（　）降りて、部屋（　）入る。

問題６番の誤用率31％中、「を」の誤用は29％、問題12番の誤用率33％中、「を」の誤用は29％、問題33番の誤用率33％中、「を」の誤用は22％、問題39番の誤用率47％中、「を」の誤用は18％、問題42番の誤用率58％中、「を」の誤用は48％、問題44番の誤用率７％は全員「を」の誤用だった。助詞「を」も動作・作用の対象を表すという用法を持つ。しかし、この６つの問題文には考察したい「に」の用法が問題39番だけ動作・作用の向けられる対象を表す用法だが、他の５つの問題にはそれぞれ違う種類の用法を取り入れてみた。それでも、「を」との誤用の割合がかなり高いことは、ただ、目的、対象を表すときの「に」と「を」の使い方を混同してしまい、不正解となったのではないことがわかった。目的、対象を表す以外の用法ともかなり間違えたことから、留学生の「を」の過剰使用傾向が見られる。留学生達が日本語を勉強し始めた初期の段階では、いかに日本語教師が、重要なポイントを強調して教えようとしても、留学生達は、自分達の独自の思い込みによる習得整理方法により、その重要なポイントを習得することが出来ず、教師の思い通りにいかなかったことを示している。この場合は、留学生は「～～を＋動詞」の形を頭の中にインプットし、特に「～～する」場合は「～～を＋する」の形が出てきやすい。従って、「～～ことにする」という用法について、どのように教えられても、「する」という動詞をみた途端に「を」を選んでしまったのではないかと考えられる。

３－２　他の助詞と併用できる割合からの分析

「と」と「に」

問題25、料理は寿司（　）天ぷらにうなぎだった。

問題27、梅（　）うぐいす。

問題１、資格審査で不合格（　　）なった学生が三人いた。

問題25番と問題27番では、名詞の組み合わせの慣用表現を表わすものとして使われる「に」に、回答から「に」から「と」への変化が見られた。反対に問題1では、「と」から「に」への変化も見られた。変化の結果ではなく、結果を表わすものとして使われている「と」と正用する場合、「に」でも可能だが、「と」の方が書き言葉やフォーマールな場合に多く使われている。しかし、問題1番は日本人の学生中、たったの6％が「と」と回答し、94％の学生が「に」と書いた。留学生の回答は「と」の場合、2％、「に」の場合96％であり、このことは「に」から「と」へ、「と」から「に」などに関係なく、日本語自体が書き言葉から話し言葉へと少しずつ変わって来ていることを示しているのだろう。

「へ」と「に」

従来、「へ」は動詞の表す動作の進行する方向を表すことに特徴があり、「に」は動詞の表す動作の到達を表すことに特徴があった。日本語教育の初級レベルでよく行われている一つの方法も、「方向」を表わす「へ」を使う可能性のある「行く」「来る」「帰る」「飛ぶ」「進む」「向かう」などの動詞の場合には、「方向」も「目的地」も「へ」で表わし、「着く」「集まる」「入る」「乗る」「座る」「貼る」「置く」などの場合は、「目的地（到着点、到達点）」を「に」で言うように、と教える方法である。しかし、アンケートの問題5番、問題21番、問題23番の回答をみると、多くの日本人の学生も留学生もこの方法に一向に拘らなかったことがわかった。

問題5、いつ国（　）帰りますか。

問題5番（方向を表わす）。日本人の学生は38％が「へ」と答え、58％が「に」と答え、「へ、に」と答えた人は2％。留学生の場合、38％が「へ」と答え、56％が「に」と答え、「へ、に」と答えた人は2％。

問題21、毎朝六時前に家（　）出て、会社（　）行く。

問題21番（目的地を表わす）。日本人の学生は46％が「へ」と書き、48％が「に」と書き、6％が「に、へ」と書いた。留学生は33％が「へ」と書き、64％が「に」と書いた。

問題23、運動をしに体育館（　）出かけた。

問題23番（方向、目的地を表わす）。日本人の学生は66％が「へ」と回答し、28％が「に」と回答した。留学生の場合は、16％が「へ」と回答し、53％が「に」と回答した。

問題17、故郷の両親（　）手紙を書くつもりだ。

問題5番、21番、23番の回答から「へ」と「に」の割合を比べてみた結果、方向、目的地を表わす場合、「へ」と「に」の使い分けがかなり薄くなって来て、

「へ」も到達点を表し、「に」も方向を表すようになってきている。但し、行動の相手、対象を示す場合には、従来の日本語教育では「に」を使うように指導しているので、問題17番の回答（日本人の学生は88%が「に」と書き、10%が「へ」と書き、2%が「に、へ」と書き、留学生は「に」と答えた人が84%、「へ」と答えた人が9%）を見ると、この問題の回答には、日本人学生及び留学生共に「に」を多く使用していることから、相手、対象を示す場合、「に」を使う用法は今も引き続き定着していると言えるであろう。

「で」と「に」

問題31、あまりの暑さ（　　）倒れる人も出た。

問題33、酒（　　）酔う。

「で」と「に」にはともに原因を表わす用法があるが、今までの文法書は「に」と「で」の原因を表す場合の区別について、はっきりさせていない。中国語の日本語文法書にはこういうような区別を書いてあり、「に」の場合、書き言葉として主に主観的な原因（感情、感覚）に多く使われ、「で」の場合、客観的な自然的な原因が主に使われ、書き言葉も話し言葉にもよく使われている。「で」は因果関係を表わす口ぶりに於いては「に」より強い。問題31番は「ために」と同じ意味で、原因・理由を表わす用法の問題だが、日本人学生の64%が「に」と回答し、36%が「で」と回答した。誤用はなし。問題33番は（原因を表わす）、90%が「に」と回答し、10%が「で」と回答した。誤用はなし。日本人学生の回答からみて、「に」を使用する率は「で」よりかなり高いので、この使い方はまだまだ定着していると言えるかもしれない。留学生の場合、問題31番の回答は27%が「に」と書き、47%が「で」と答えた。誤用は27%であった。「で」を使う人は「に」より20%上回った。「で」を選んだ人は「倒れる人も出た」ということになった原因の依拠としての「あまりの暑さ」に関係なく、外的な立場から付加的に述べられたから「で」と答えたのだろう。問題33番の回答は42%が「に」と答え、24%が「で」と答えた。誤用は33%であった。「に」の正用率は「で」の非用率より高い。

3－3　ダミー問題について

問題16、日本（　）は、この大学が一番古い。

問題16番は限定された場所やグループの中での最上級を表わす「では」だが、31%の留学生が「には」と回答した。この問題の誤りは、所属（持っている）或はある場所に存在するという意味に取ったではないか。

問題20、新型の飛行機が空（　）飛んでいる。

これは飛行機が飛んでいるという進行中の状態を示していて、経過点を示す「を」を解答してほしいと期待したのが、多くの学生が「空」という場所だけを捉えて考え、「に」と書いたものと考えられる。日本人の学生は46%、留学生は42%が「に」と答えた。

問題41、家の前（　）通り過ぎる。

問題41番は経過点に重点をおく「通る」という動詞には、経過点を示す「を」を正解とする問題である。ここでも「位置名詞＋前＋に」というユニット形成の傾向が見られ、44%の留学生は家の前、という言葉を単に存在する位置として理解し、「に」と書いて、不正解となったのだろう。

問題29、子供の時（　）彼を知っている。

起点を表わすものとしての「から」と回答すべき問題29では、「に」と答えた留学生が56%を占めた。ここでの誤りは起点として考えるべき（子供の時）という言葉を、多くの留学生は時を表わす言葉として考えたので、また、「〜〜時」の後直ぐ「に」が来るという形をセットで覚え、（知っている）という状態に関係なく、「に」と解答して、間違ったのではなかろうか。

問題35、雲の具合（　）判断すると明日は雨だ。

問題35番は24%の留学生が「に」と回答し、不正解となった。ここの「から」は時間的・空間的・因果関係を表すものである。判断した結果の根拠として捉えるべき雲の具合を、多数の留学生は、「から」、「で」、「によって」などの助詞を入れるかわりに、対象の「に」を入れて不正解となったものと考えられる。

3－4　留学生の誤用の回答からわかること

中国人学習者が日本語を学ぶ視点から、助詞「に」の用法について学び、初級日本語教科書に出現した「に」の文型などを調査し、アンケートを行って、習得状況を分析した。その結果、以下のことがわかった。

1．現在発行されている外国人学習者を対象とした日本語文法の書籍では、助詞「に」の用法のまとめがまだ不充分であり、また、各助詞の用法の解釈ももっとわかりやすく、種類も十分に揃える必要があるように思われる。

2．中国人学習者の助詞「に」の用法の習得程度によっての、初級日本語教科書の中での「に」の文型の出現順序による差異は見受けられなかった。

3．外国人学習者が日本語を勉強する際には、独自のストラテジーを持つ、という理論（迫田2001）は、今回行ったアンケートの中国人学習者の回答からも証明することができた。例：「お〜〜になる」「位置を示す名詞＋に〜〜があります」「〜〜に住んでいます」などのようなユニットの形成が見られる。

4．中国人学習者が「〜〜を＋動詞」、特に「〜〜を＋する」というようなユニッ

トの形成傾向があるから、「を」の使用過剰をもたらしていることが予測される。こういうことから、解答の正解だけに注目することなく、非用、誤用になる原因もじっくりと分析する必要があると考えられる。

また、今回のアンケートの対象の留学生の日本語レベルは上級であろうと想定されたが、実際の回答からみて、初級の問題もまだ、よく把握していないし、上級問題の正用率はさらに低かった。留学生にとっては、助詞が上手く使えるかどうかが、直接文章を上手く書けるかどうかの鍵となる。しかし、留学生にとって助詞の使い方は懸命に覚えようと努力しても、なぜ、使いこなせないのだろう。これは単に留学生自身の問題ではなく、日本語を教える側の教え方とさらに言えば日本語そのものの複雑さに関係があるのだろう。

終わりに

この論文を書き終えた頃、いくつかの問題点に気づいた。まず、中国人学習者が助詞「に」の用法をどの程度習得しているかを知るため作った問題文では、取り入れた用法の種類のバランスをもっとよく広げるべきであった。次に、日本語を学ぶ初級段階の場所（日本国内、日本国外）別の分析によっては、中国人学習者のアンケートの回答の結果が異なることも予想される。また、アンケートの対象となった日本人学生の回答にも疑問がある。日本人学生がよく考えずに、不注意なミスを犯し、不正解になってしまった可能性もある。このようなアンケートの調査方法や回数によっては、分析の結果も違って来るものと考えられる。最後に、アンケートの回答から、日本語母語話者も中国人学習者も共に、同じような「に」の非用が見られるので、日本語自体が変化してきているのであろう。

注：1．タイトルの「習得」という用語はここでは「学習」と「獲得」両方の意味を持つ。
　　2．学習者は教室指導を受けている学習者だけを意味する。

参考文献：

1．石沢弘子・豊田宗周監修　株式会社スリーエーネットワーク編集（2002年）『みんなの日本語　初級Ⅰ、Ⅱ』株式会社スリーエーネットワーク発行
2．海外技術者研修協会編集（1997年）『新日本語の基礎Ⅰ、Ⅱ』株式会社スリーエーネットワーク
3．文化外国語専門学校日本語科編集（1995年）『文化初級日本語Ⅰ、Ⅱ』発行者大沼　淳
4．国際学友会日本語学校　著作（1994年）『国際する人のための日本語初級』

財団法人国際学友会
5．益岡隆志・田窪行則（1987年）『日本語文法セルフ・マスターシリーズ３「格助詞」』くろしお出版
6．茅野直子・秋元美晴（1986年）『外国人のための「助詞」その教え方と覚え方』武蔵野書院
7．北川千里・鎌田　修・井口厚夫（1988年）『外国人のための日本語　例文・問題シリーズ７「助詞」
荒竹出版
8．富田隆行（1996年）『文法の基礎知識とその教え方』凡人社
9．迫田久美子（2002年）『第二言語習得研究』アルク
10．国際交流基金編（昭和58年）『教師用日本語教育ハンドブック③「文法Ｉ」』凡人社

付記：
本稿は平成十七年度外国語研究科日本語専攻・修士論文を修正したものである。ご指導戴いた玉井美穂子先生、市井外喜子先生、鈴木康之先生に心より御礼を申し上げます。